



ふと思ひ  
浮かぶ  
こと

川崎ゆきお

ふと思ひ浮かぶ。

「それは何でしょうねえ」

「ふと思ひ浮かぶことができますか」

「私は色々な判断を下しているのだがね。日によって違うんだ」

「課長の判断で、仕事の流れが変わります」

「ああ、だから、妥当な判断をいつも下しているつもりだけど、たまに気分的に決めてしまうことがある。これは言っちゃあいけないことだけど」

「課長のところに来る業者ですが、色々と誘惑があるでしょう」

「袖の下は取れないよ。当然だろ」

「それはもう業者たちも分かっていますから、そんな反則はしないと思いますが、ご機嫌取りはするでしょ。印象の良さで上手く行くかもしれませんしね」

「いや、そんな業者は最初からパスだ。逆効果だね」

「しかし、課長の判断はいつも公平で正しいと評判です」

「そうでもないんだよ。結構気分的なんだ」

「そうなんですか」

「ふと思ひ浮かぶ」

「はあ」

「ふと思ひ浮かぶんだ。判断を下すときにね。これは何だろうかと思うんだ」

「難しい話ですか」

「難しいも何も、頭の中に、そういうものが湧き出して来てね、その流れに沿いたくなる。乗ってみたいくなる。意識的じゃないけど、それが意識に上るんだ」

「はあ、何の話でしょうか」

「だから、判断するとき、ある雰囲気にも包まれるんだ」

「怖いものですか」

「怖くはないよ。君」

「はいはい」

「それは何処から湧き出すのだろうか、考えたことがある」

「何処からでした」

「分からない。いきなりだ。いきなり昔の歌謡曲が流れ出したりする」

「やはり、怖いじゃないですか」

「いや、だからその手前で、その歌謡曲を連想させるものを見たり聞いたりしたんだらうねえ。それはすぐに消えるがね」

「じゃ、いきなりじゃないのですね」

「そうだね。きっかけとなるものが先にある」

「それは何でしょう」

「だから、机の上に置いてある煙草の銘柄をふと見たとき、その銘柄から連想されるものが上がってくる。すると、その劇が始まるような感じになるんだねえ」

「げ、劇ですか」

「それは適当な言い方じゃないけど、小さな劇が片隅で起こるんだよ」

「それはお病気では」

「いやいや、子供の頃からそうだったのでね。それにその影響はない。他のことを思っているようなもので、幻覚でも幻視でもない」

「それが、ふと思いつかぶのですね」

「そうそう。それが浮かんでいるときに、何かの判断を下すときがある。それが浮かんだから判断するんじゃないよ」

「要するに、そのときの雰囲気で、判断も変わると言うことですか」

「そうだね」

「それは、業者の態度が影響していませんか」

「していない。それとは別のところのものだろうねえ。だから、好印象でも悪い印象でも、業者のそれではない。無関係だ」

「しかし、課長の判断はそんなに波はありませんよ。安定しています。突拍子もない判断をされない。なのに、気分的なのですか」

「いやいや、だから、そのふと思いつかぶ気分的なものはそれほど影響力はないのだよ。それにつられて思わぬ判断を下すようなこともない」

「やはり、難しい話ですよ、課長」

「君はそういうことはないかね」

「僕の場合、雑念や邪念ですよ。余計なことを思ったりします」

「それに近いのだがね、しばらくその雰囲気が続くんだ」

「それで、その雰囲気で判断を下すと」

「だから、それほど影響はない」

「はあ。じゃ」

「そうだね。影響がないのだから、言わなくてもいいことなんだろうねえ」

「どう聞けばいいのか、困ります」

「私も説明に疲れた」

「はい、じゃ、僕はこれで」

男は課長との面談を終え、外に出た。

この男も業者で、何とかこの課長に取り入ろうとしたが、方法がないようだ。乱視のようにピントがはっきり掴めない。

上手い対応方法で、拒否されたのかもしれない。それを思うと、あの課長、かなり手強い。